



小説「氷点」の舞台 外国樹種見本林(旭川市)

森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

旭川市神楽の美瑛川沿いに広がる国の外国樹種見本林は1898年に開設され、欧米の針葉樹を中心に50種類以上が植えられています。

1964年に三浦綾子さんが発表した小説「氷点」の舞台となって以降、全国から訪れる人が増え、1998年には入り口付近に三浦綾子記念文学館がオープンしました。

林内には原作の一部を抜粋した案内板が各所にあり、巡りながら小説の世界を体験することができます。



外国樹種見本林。看板の背後はストローブマツ林

見上げるストローブマツ

駐車場の周辺には見上げるほど高いストローブマツが林立し、訪れた人を圧倒します。

名前は学名から来ており、英語名はイースタン・ホワイト・パイン。米国北東部に分布する材が白いマツです。成長が早く、高さは20~50mにもなります。マツは普通、2本の細い葉が束になって枝から出ていますが、ストローブマツは5本1束なのが特徴です。

小説では冒頭からこの木が現れます。「ストローブ松の林の影が、くっきりと地に濃く短かった。その影が生あるもののように、くろぐろと不気味に息づいている」。不安をかきたてるような書き出しです。

一方、この木の切り株は、主人公の陽子が読書をしていた時、北原と出会った思い出の場所です。恋する北原に会いたくなると、必ずそこに座ります。

「陽子は切り株に腰をおろして、空をみあげた。ストローブ松のやわらかいみどりの梢が、日に輝く白い雲の中を流れて行くようであった」。空に向かって真っすぐ伸びる高木。その枝が上空で風に揺れる様子が巧みに表現されています。

ストローブマツ林には「ストローブ松の切り株」という案内板が掲示され、小説の一節が書かれています。近くに切り株はありませんが、代わりに置かれている木製ベンチに座ると、主人公の気持ちになれるかもしれません。



「ストロブ松の切り株」と題した案内板

樹形が独特なドイツウヒ

ストロブマツの林を奥へ進むと、ドイツウヒ林があります。欧州原産でヨーロッパトウヒともいわれ、アカエゾマツと同じトウヒ属です。

高さ20～30mまで成長し、老木になるほど小枝が長く垂れ下がる独特な樹形です。松かさが10～20cmと長いのも特徴です。樹皮は黒褐色で、うろこ状にはがれます。

木目が緻密で振動の吸収が小さく、音の響きがいいことから、バイオリンなど弦楽器の響板作りに欠かせません。年末はクリスマスツリーとして使われます。ドイツの工芸品、鳩時計のおもりはこの松かさをデザインしたものです。



ひときわ高くそびえるドイツウヒ

耐寒性があり、葉が隙間なく生い茂るため防風性が高く、道内では防雪林として鉄道や高速道路沿いに植えられています。

小説では重要な場面に登場し、読者に強い印象を与えます。行方不明の娘を探す母親がドイツウヒの林に入ると「滅多に陽に当たることのない林の中の路は、やわらかく湿っている」。そこでカラスの死骸につまづき、不吉な予感がします。

ただ、陽子にとっては不快なイメージはありません。夏、兄と散歩した際は「林の中は、光が夕もやのようにたちこめている。印象派の絵を見るような美しさだった。『この林は暗いけれど、一番好きよ』』と言うのです。

そして冬、死に場所と決めた川へ向かうために入ったドイツウヒ林は、「小さい時からよく遊んだ、思い出の多い林だわ」と感慨にふけります。



「ドイツウヒの林」と題した案内板

林を彩るツルアジサイ

見本林は堤防をまたぐ形で美瑛川の川岸まで続いています。開設当初は遮るものはありませんでしたが、頻発する洪水対策のため1958年、堤防が建設されました。

この場所では主人公が生き生きと描かれます。「陽子はすばやく徹の横を通りぬけて、一気に堤防をかけ上った。堤防に接して青い空がある。下からみると、堤防の上の陽子は青空の中をあまかけているように見えた」

堤防沿いでは、5月上旬になると淡紅色のエゾヤマザクラ、6月中旬には黄色味を帯びた白色のハシドイが咲きます。

ハシドイはたくさんの花が円錐状に付きます。枝の端に集うように咲くのが語源です。英名はジャパニーズ・ツリー・ライラック。ライラックの仲間、芳香があります。ライラックより樹高が高く、1カ月ほど遅れて開花します。樹皮はサクラに似ており、北日本の林内に多く見られます。

一方、入り口の文学館周辺では6月中旬、ストロブマツに絡みついた白いツルアジサイが開花します。

アジサイの仲間です。状に伸びる木です。日本各地の林内に自生しています。花びらに見えるのはがくが発達した装飾花で、中央部に咲く小さな花々を数個の装飾花が取り囲んでいます。

よく似た樹木にイワガラミがあります。ツルアジサイの装飾花はがく片が3～4枚なのに対し、イワガラミは1枚なのが識別するポイントです。

常緑針葉樹が多い見本林は、落葉広葉樹のような開花や紅葉といった季節の変化がなく単調に見えがちですが、この時期は入り口のツルアジサイが来訪者の目を楽しませてくれます。



見本林の中央部に延びる堤防



ストロブマツをよじ登るツルアジサイ

強烈な印象が決め手に

三浦さんが小説の舞台を見本林にするきっかけは、夫光世さんの誘いでした。

光世さんの「見本林と文学館」（「信じ合う支え合う 三浦綾子・光世エッセイ集」北海道新聞社）によると、光世さんが初めて見本林を見たのは1956年。勤務していた旭川営林局の上司の勧めでした。

「なるほど静かで美しい林である。ストロブ松の一画が特に印象的であった」。そこで光世さんは、女学生の時に一度遠足で行ったことがあるという病床の三浦さんを、再び見本林に立たせたいと考えます。

三浦さんは13年間の闘病を終え1959年、光世さんと結婚。見本林行きが実現したのはその翌年でした。「二人はおにぎりを携え、林を抜けて美瑛川のほとりに立ち、念願の日を与えられたことへの感謝の祈り捧げた」と光世さんはつづっています。

一方、三浦さんは当時の様子をこう回顧しています。

「その林(ドイツトーチ林)に一步足を踏み入れた時、わたしは名状し難い感動に襲われた。暗い林の中に、光が縞目をつくって斜めに射し、その縞目もおぼろな彼方に、光が煙のように漂っていた。真っすぐに伸び立つドイツトーチの幹は、まことにしんとしたたたずまいで、名画を見るような趣があった」(「この土の器をも」新潮文庫)

そして「その時の印象が、あまりに強烈であったため、わたしは小説の筋が決まると、ためらわずここを舞台に決めたのである」(同)



三浦夫妻が一緒に見た美瑛川

弱者に優しい文学館

三浦綾子記念文学館の設立は多くの人に支持され、寄付金は1万5千人から総額2億1700万円が集まりました。さらに旭川市は1億2千万円、道は1億円を拠出しました。

建設にあたり三浦さんが望んでいたのは、体が弱い人に優しい設計でした。難病のパーキンソン病と闘う

三浦さんだからこそこの指摘です。完成した2階建ての文学館は三浦さんの意向をくみ、段差をなくし、エレベーターを完備しました。

1998年6月13日午前の開館セレモニーには三浦夫妻が出席し、テープカットが行われました。午後からの記念式典では、設立実行委員会代表委員の五十嵐広三元衆議院議員が「一番うれしいのは、たいへんな難病に耐え、頑張ってきた三浦綾子さんに、開館の喜びとともに味わっていただけたこと」(北海道新聞旭川版1998年6月14日)と語りました。

五十嵐さんが三浦さんと初めて会ったのは、三浦さんがまだ無名時代で、五十嵐さんが旭川市長になる前年の1962年。以来交流が続き、五十嵐さんは文学館を運営する三浦綾子記念文化財団の理事も務めました。

文学館の完成を見届けた三浦さんは翌1999年10月12日、77歳で亡くなります。五十嵐さんは「市民の一人として、古い友人として、三浦さんと同じまちで同時代に生きることでできたことを感謝し、誇りに思う」(北海道新聞旭川版1999年10月14日)と心情を吐露しています。

感謝の気持ちを形にするには、文学館だけでは足りなかったのかもしれませんが。翌2000年、彫刻家の佐藤忠良さんに銅像制作を依頼します。完成した頭像は同財団に寄贈され2001年12月18日、文学館で披露されました。夫の光世さんが「言いようのない感動を覚えた」(北海道新聞2001年12月19日)像は同館の2階に展示されています。



見本林内にある三浦綾子記念文学館